

# カトリック 仙 台 教 区 報

No.246 2022年4月24日

発行: カトリック仙台司教区  
〒980-0014 仙台市青葉区本町1-2-12  
Tel.(022)222-7371 Fax.(022)222-7378  
発行責任: 仙台教区広報委員会  
URL <http://sendai.catholic.jp/>

## 仙台司教区にガクタン・エドガル司教 誕生!

### 「新しい創造」に向けて旅をつづけよう



昨年12月8日(無原罪の聖マリアの祭日)に、選任されたガクタン・エドガル被選司教の叙階式が3月19日、元寺小路教会大聖堂で行われました。コロナ禍のため参列者を絞り、また2日前に震度6強の地震がありましたが、駐日教皇大使や各教区の司教、仙台教区の司祭や信徒の代表など約150人が参加して行われました。

叙階式は、菊地功大司教の司式で、厳かに始まり、フィリピン、ベトナム、韓国の方々など、日本人信徒だけではなく、国際色豊かな人々が集まつて、皆で祝うという温かい雰囲気の中で進められました。

また、叙階式後の式典の中では、かつてガクタン司教が主任司祭を務めた大船渡教会の有志の方々の「ガクタン音頭」(山浦玄嗣作詞)(別刷り)の朗読が披露されるなど、和やかな中で終わりました。



#### ガクタン司教 挨拶 (要旨)

本日は、私の司教叙階式にご参集ください、ありがとうございました。

まず挨拶に入る前に、数日前の地震によって被害にあられた方々に一言お見舞い申しあげます。また、この数週間のウクライナでの惨劇で尊い命を失った方々とロシアでも生活に困っておられる方がたくさんおられます。希望を失うことなく1日も早い、よりよい形での終息が与えられますようお祈り申しあげます。

このたびの地震は本当にびっくりしました。今もまだ、新幹線が止まっている中、たくさんの司教様が参列し、信徒の方々、司祭と修道者の皆様が共に祈ってくださったことは、これから私の歩みへの力強い励ましとなり、また大きな助けとなるでしょう。

司教叙階の恵みは、大変な時にも、困っている時だからこそ「ひとつになって祈る」私たちに与えられたことを神さまに心から感謝いたします。

主司式をしていただきました菊地功大司教様、共同司式をしてくださいました山野内倫昭司教様、

松浦悟郎司教様、駐日教皇大使レオ・ボッカルディ大司教様、前田万葉枢機卿様、その他の司教様方、司祭の皆様方、またこの場またはオンラインで祈りを共にしてくださいました多くの皆様、また裏方として準備をしてくださいました教区本部の方々、奉仕してくださいました司祭信託の皆様方、本日は誠にありがとうございました。

先程、菊地大司教様は、私と仙台教区の縁について述べられました。11年前の5月に前任者の平賀司教様は基本計画を発表されました。計画の冒頭で、次のことを述べられました。その一段落だけを引用したいと思います。

「この大災害のなかにある今、キリストと結ばれて新しく創造された者である私たち教会は、キリストが抱いたと同じ思いを抱きながら、一日一日、いっそうの『新しい創造』へと力強く歩みたい。」

ここで、仙台教区の司牧に長年携わり、震災後、ぶれない指導力を示してくださった平賀徹夫司教様、小松史朗神父様に心から感謝を申しあげたいと思います。

今日にいたるまで、仙台教区は新しい創造に向かって同じ道を歩んでいると思います。

神様は私たちを新たに創造してくださいます。毎日が新しい出発です。日々の出会いは、新しいものの見方、新しい関わり方、個人や共同体の新

しい在り方をもたらしてくれます。

3月11日の災害からこの12年目にあたり、仙台の教会も新たに出発しています。11年前と同様に、私はこのみちのくの旅に加えられた恵みをいただいています。

自分自身と自分の限界を覚えながら、私がこの旅の舵（かじ）取りをしていると思うと震えがります。しかし、私は聖霊の力を信じています。

今日の第一朗読をとおして「一人一人の“靈”の働きが現れるのは、全体の益となるのです。」と教えてくれました。パウロの言葉です。

私は自分の限界を知っていますが、隣にいる人が私の不足を補う賜物を持っていることも知っています。神は私や皆さんを一人にされないと確信し、今、私はここに立っています。

一緒に「新しい創造」に向けて旅を続けましょう。そして、今日、新しい旅を始めるにあたり、神様に感謝をささげましょう。

新型コロナウイルス感染防止のために、私たちは声を上げて十分に笑うことも喜ぶこともできません。その時が来たら、話しましょう、抱きしめましょう。私たちはどの方向に教会を進めたいのか。言葉が見つからなければ、そのままいい。時が来たら、必要な言葉が出て、理解も得られ、何か新しいもの生まれるでしょう。

## 教皇フランシスコの任命書(日本語訳)



神の僕の僕、私、司教フランシスコは、愛する子、淳心会員でありこれまで同会の正義と平和委員会秘書を務めていた司祭ガクタン・エドガルに挨拶と使徒的祝福を送ります。

私は驚嘆すべきキリストの教えを宣べ伝える役務に専心しながら、知恵と識別の靈、思慮と徳の靈、主を知り、畏れ敬う靈に従おうとしています。(かつて預言者イザヤに与えられた)この靈を主は再び教会に与えたのです。傷ついた私たちを憐れに思い、近づいてその傷を癒すために包帯を巻き、私たちが実を結ぶようになるとデナリオ銀貨を預けていかれたのです(エイレニアオス『異端反駁』第3巻17章3項参照)。このような主からの信託に促され、どのようにしたらキリストを信じる者の魂の救いのためになるかと思慮しながら、私は慈しみをもって仙台教区の教会共同体に心を向け

ています。平賀徹夫司教の引退により、教区を統括する新たな牧者を待ち望んでいるからです。

愛する子よ、私はあなたについてこう考えました。あなたがこれまで果たしてきた様々な職務、そこでのあなたの働きは、あなたが人間としても司祭としてもすばらしい資質に恵まれ、支えられていることをはっきりと示したのです。このことから、私はあなたが司教職を引き受けるのに相応しいと判断します。

それゆえ、福音宣教省の意見を聴いた上で、私は使徒の全き権威をもって、あなたを仙台教区の司教として立てます。これには然るべき権利とそれに応じた義務がともないます。司教叙階は、予め、教会法に従つて信仰宣言を行い、私と私の後継者への忠誠を誓約した上で、ローマ以外の任意の場所で、典礼法規に則り、カトリック司教から受けることができます。私はあなたがこの決定について仙台教区の司祭団と教会共同体の人々にしっかりと伝えるように望みます。また、仙台教区の共同体には、あなたを、敬愛する保護者、指導者として受け入れるように心から勧めます。愛する子よ、あなたは常に熱心に、あなたの手に委ねられた群れを牧しなさい。そして、最初に福音宣教が始まったまさにその時、神が慈しみのうちに働いていたのですから、あなたもまた信じる者の心に忍耐強く慈しみを注ぎなさい。

2021年12月8日 無原罪の聖マリアの祭日  
教皇在位第8年

ローマ、ラテラノにて教皇フランシスコ

## ガクタン・エドガル司教叙階式説教 東京教区大司教 菊地 功



「何もしなければ結果はゼロですが、一歩踏み出せば一步前に進みます。・・・連帯と相互の献身に基づく未来を築くための一歩です。」

2019年11月25日、東京で東北の方々と出会った時の、教皇様の言葉です。

11年前、仙台教区の皆さんをはじめとして日本中の多くの方が、歴史に残るであろう出来事を体験しました。東日本大震災は、東北の沿岸部を中心に甚大な被害をもたらしました。

巨大な自然の力を目の当たりにして、わたしたちは人間の知恵と力のはかなさを痛感させられました。人間には限界があるという当たり前のことを思い知らされました。しかしながら、その後に続いた復興支援の歩みは、理不尽な出来事のただ中にあっても、それでも、わたしたちは神のいくしみの手の中で包み込まれ生かされているのだという事実を、あらためて認めさせる体験となりました。「連帯と相互の献身」を通じた支え合いこそが、いのちを生きる希望を生み出すのだと言うことを、さまざまな出会いが証明してきました。教会は、この11年間、地域の方々とともに歩み支え合う行動を通じて、その存在自体が福音の愛のあかしとなってきたと、私は思っています。

教皇様は東京の集いで、さらに加えて次のように言われました。

「一人で『復興』できる人はどこにもいません。だれも一人では再出発できません。町の復興を助ける人だけでなく、展望と希望を回復させてくれる友人や兄弟姉妹との出会いが不可欠です」

仙台教区の皆さんと、全国の教会の皆さんと一緒にあって、「展望と希望を回復させてくれる友人や兄弟姉妹との出会い」を生み出してきたのが、この11年の歩みではなかったでしょうか。

皆さんご存じのように、ガクタン司教様は、その歩みのただ中におられました。大船渡を中心には、さまざまな出会いを、連帯を、支え合いを生み出す中心に、ガクタン司教様はおられました。「連帯と相互の献身に基づく未来を築くため」、確実に一歩を踏み出す事ができるようにと、その活動の中に、ガクタン司教様はおられました。

あの大震災という出来事から9年が経過した2020年、わたしたちはあらためて人間の限界を思い知らされる出来事に遭遇しました。新型コロナ感染症の世界的な拡大です。

感染症への対策は、わたしたちが慣れ親しんできた教会の姿を大きく変えてしました。

同時にわたしたちは、実際に日曜日に集まることができない中で、それでは教会とはいつても何であるのかと自問する機会を与えられています。

教皇様は、2020年9月2日の一般謁見で、こう話されています。

「このパンデミックは、わたしたちが頼り合っていることを浮き彫りにしました。わたしたちは皆、良くも悪くも、互いに結びついています。この危機から、以前よりよい状態で脱するためには、ともに協力しなければなりません。・・・

調和のうちに結ばれた多様性と連帯、これこそが、たどるべき道です。」

残念なことに今わたしたちは、「調和のうちに結ばれた多様性と連帯」と真っ向から対立する、戦争の危機のまっただ中であります。しかし同時に、この危機的な状況の中であっても、多くの人が世界中で、平和のために声を上げ連帯して行動していることは、暗闇の中の小さいけれど力強い光として、わたしたちの希望となっています。連帯は希望を生み出します。希望は未来への展望を生み出します。

東京ドームミサでの教皇様のことばに、教会の今この時のあるべき姿を見いだします。

「いのちの福音を告げるということは、共同体としてわたしたちを駆り立て、わたしたちに強く求めます。それは、傷のいやしと、和解とゆるしの道を、つねに差し出す準備のある、野戦病院となることです」

この危機のなかにあって、「傷のいやしと、和解とゆるしの道」を差し出す共同体であるためには、先頭に立つ牧者が不可欠です。教会共同体のあるべき姿を示す牧者が必要です。多様性を自ら生きる牧者が必要です。連帯と支え合いを自ら示す牧者が必要です。この時に、新しい牧者として、ガクタン司教様を任命してくださった教皇様の配慮にも、共に感謝したいと思います。

さて皆さん、人類をあがなうために御父から遣わされたわたしたちの主イエス・キリストは、ご自分も十二人の使徒たちを世にお遣わしになりました。それは、彼らが聖霊の力に満たされて福音を宣べ伝え、そしてすべての民を牧者のもとに一つに集めて、これを聖なる者とし、治めるためでした。使徒たちはこの務めが世の終わりまで続けられるように、自分たちの助け手を選び、キリストから受けた聖霊のたまものを按手によって彼らに与えました。この按手を通して、叙階の秘跡が余すことなく授けられます。こうして一つの時代から次の時代へと、司教職が絶え間なく受け継がれることによって、この中心となる伝承が保たれ、救い主のわざがわたしたちの時代にまで続き、また発展しているのです。

イエス・キリストご自身が司教の奉仕職のうちにおられ、自ら福音を宣べ伝え、信じる人々を信

仰の秘跡をとおして聖化し続けておられます。ですから皆さん、わたしたち司教が按手によって司教団に加えるこの兄弟を感謝と喜びのうちに迎え入れてください。福音の真理をあかしする務めと、靈と義を与える奉仕職をゆだねられる新しい牧者を、キリストの役務者、神の秘義を人々にもたらす者、使徒の後継者として尊敬をもって受け入れてください。

ところでガクタン・エドガル被選司教様、あなたは主から選ばれ、ペトロの後継者によって仙台教区の牧者として任命されました。司教職とは名誉ではなく、奉仕です。折りが良くても悪くても神の言葉をのべ伝え、忍耐を持って励まし、教えてください。そして自分にゆだねられた民のための祈りといけにえをささげるにあたっては、聖性に満ちあふれたキリストに倣い、その恵みを豊かにいただくように務めてください。

あなたにゆだねられた教会においては、忠実にキリストの秘義をもたらし、管理し、そして守る者となってください。御父から神の家族を治めるように選ばれた者として、いつもよい牧者キリストを忘れないでください。

神があなたにゆだねるすべての人を、父として兄弟として愛してください。とりわけキリストの奉仕職における協力者である司祭と助祭には愛を持って交わり、さらに、貧しい人、弱い人、旅路にある人、故郷を離れて生きる人々、忘れ去られた人、孤独のうちにいる人、社会から排除された人に、特に愛を注いでください。キリスト者があなたと共に、福音を告げる使徒となるように励ましを与え、また、信徒の声によく耳を傾けてください。まだ福音に触れていない多くの方々も、主においてあなたにゆだねられている人々として大切に心にとめていてください。

ガクタン被選司教様、あなたは神の教会を治めるために聖霊によって遣わされるのですから、群れ全体を注意深く世話してください。あなたが教会の中でその姿を示す御父のいくしみ深いみ名によって、そしてキリストの教会を生かし、わたしたちの弱さをその力によって強めてくださる聖霊のみ名によって、あなたにゆだねられた群れ全体を愛し、養い、育て、守り、導いてください。

## 司教の紋章の説明



### モットー

「心も思いも一つに」（使徒言行録 4・32）

一つになることは聖霊の実りであるとともに、私たちが切に望むたまものもあります。シンボルの上半分は、聖霊の働き(鳩)と人間の思い(心)の調和を表します。下半分は、十字架と漢字の「心」からなります。これは、いくしみ深い神と真(まこと)を求めるさまざまな人間が近づきあい、互いの思いが響きあっていることを示します。主イエス・キリストに倣う教会は人々と共にうめき、「あなたは一人じゃない」と呼びかけ、苦悩し、祈り、希望し、助け合い、笑いあい、感謝をささげます。

## ガクタン・エドガル (GACUTAN,Edgar) 司教の略歴



1964年 9月23日	フィリピン、ルソン島東北部カガヤン(Cagayan)州で誕生
1986年 10月19日	淳心会で初誓願
1990年 2月	来日
1991年 6月 2日	淳心会で終生誓願
1992年 3月 20日	助祭叙階式(大阪カテドラル)
1994年 4月 23日	司祭叙階(フィリピン)
1994年 5月～1997年 3月	金剛教会・三日市教会(大阪大司教区) 助任
1997年 4月～2003年 11月	堺ブロック(大阪大司教区)共同宣教司牧
1996年 1月～2001年 12月	淳心会神学生養成担当
2002年 4月～2022年 3月	社会福祉法人 淳心会(堺市)理事長
2004年 1月～2007年 12月	カトリック青年労働者連盟(JOC)全国協力者
2004年 1月～2012年 12月	淳心会日本管区 管区長
2013年 1月～12月	サバティカル(フィリピンとアメリカ)
2014年 1月～2017年 3月	カリタス大船渡ベース ベース長、仙台司教区第4地区担当、仙台司教区外国人支援センター センター長
2017年 4月～2022年 1月	松原教会(東京大司教区)
2018年 4月～2022年 3月	学校法人淳心学院(姫路市)理事長
2020年 7月～2022年 12月	淳心会アジア管区・日本地区 地区長
2021年 12月 8日	教皇フランシスコより仙台司教区司教に任命される
2022年 3月 19日	仙台司教区司教叙階



## ご挨拶

教皇大使  
レオ・ボッカルディ大司教

親愛なるガクタン・エドガル司教様  
また兄弟である司教様方、神父様、男女修道者の皆様  
そしてキリストのうちに兄弟姉妹である皆様

私たちは、このミサを通して、聖靈降臨の奇跡を追体験しました。ガクタン司教様、聖靈は、叙階の祈りと按手によって、あなたをイエス・キリストの使徒とし、司教団の中に迎え入れ、聖なる仙台の教会の頭となさいました。あなたは、仙台の教会をすでに長く知っています。そこで宣教師として働き、2011年の大震災のあとは、三年にわたり、あなたが真剣に愛を注いだ教会です。

今日からあなたは、新しい役割を担い、もはや淳心会の宣教師としてではなく、マルチノ平賀徹夫司教様の後継者として、司教という新しい務めを果たすことになります。ここで、改めて仙台教区の司牧に長年携わってくださった平賀司教様と小松史郎神父様に心から感謝したいと思います。

ガクタン司教様、今日からあなたは「父」であり、「牧者」であり、また「師」となります。あなたは、この教区の経営者や管理者ではありません。あなたに託されたキリストの共同体を誰よりも愛すべき存在であり、共同体は、あなたから神のみ言葉の贈り物を期待しているのです。また、あなたは、自分の新しい家族となった司祭たちの父親となり、友となります。どうか司祭たちを愛し、司祭たちの話を聞き、司祭たちと共に働いてください。教会は、今日あなたに「その覚悟ができ

ていますか」と尋ね、あなたは「はい、できています、神の恵みによって」と答えました。

あなたが司教に任命されたことを、私があなたに伝えた日のことを覚えていますか？ その日の福音は、イエスが弟子たちに向かって「あなた方が彼らに食べ物を与えなさい」とおっしゃった箇所でした！

仙台教区は、あなたの内に、日々の糧だけでなく、神のみ言葉、信仰、神の愛の糧を与える方の姿を見たいと願っています。あの日、私はあなたに十字架をプレゼントしました。キリストが十字架を背負い、三度倒れてもまた起き上がり、再び十字架の道を歩んだように、あなたもその十字架を首にかけるだけでなく、肩に背負っていくよう召されています。

また今日は、ペトロの後継者であり、全教会のことを思っている教皇フランシスコを身近に感じてください。Cum Petro e sub Petro（ペトロと共に、ペトロのもとで）です！

フィリピン人宣教師が、日本で司教になったことに、誰も驚くべきではありません。カトリック教会は宣教的であり、世界に開かれ、全ての人を包み、互いに与え、受け、誰も外人ではないことを意味しています。あなたの教区には大勢の外国人労働者がいますが、あなたは彼らの間にも出て行き、どうか自分の国や家族から遠く離れて暮らしている彼らの面倒をみてあげてください。

今日、日本のすべての司教が、あなたを兄弟として迎え入れます。どうか兄弟的な交わりを育み、神の民のために、皆で一緒に働くことも忘れないでください。

あなたが受け取った指輪は、この仙台の教会に対するあなたの愛と忠実のしるしであり、あなたはこの教会を花嫁のように愛さなければなりません。

無原罪の聖母マリアが、あなたの務めに寄り添い、聖母の汚れなき御心が、あなたに仙台教区をどのように愛し、仕えたらよいかを教えてくださいますように。神の祝福がありますように！



## お祝いの言葉 (要旨)

日本カトリック司教協議会  
会長  
菊地 功 東京教区大司教

日本の司教団を代表して、お祝い申し上げます。  
ガクタン司教様おめでとうございます。そして、これまで長い間仙台教区を導いてくださった平賀徹夫司教様、本当にご苦労さまでした。ありがとうございます。

今、日本の教会は困難な状況の中で、ともに歩む「シノドス」の道と一緒に歩んで行こうと努力をしています。ガクタン司教様も司教団の中で一緒になって共に歩み、協力を取り組んでいきたいと思います。

私ごとですが小学校3年生の時、盛岡で岩手県の信徒大会がありまして、小林有方司教様から堅信を受けました。その時小林司教様が四ツ家(盛岡市)の教会を訪ねた時に子どもたちと一緒に撮った写真を今でも大事にしておりますが、堅信を授けてくれた仙台の司教様の後継者の叙階式を自分が司式するなんて思ってもみなかつたので、非常に感動しておりました。

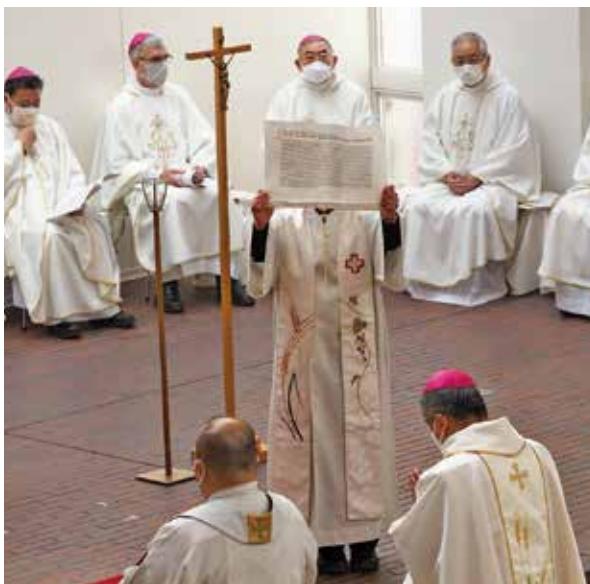
駐日教皇大使も話しておられましたが、フィリピンからの宣教師が仙台司教になるなんて、誰も想えていなかつただろうと。それは、教会は互いに与え、助け合うという連帯の関係にある中で、教会の普遍性を示す象徴として、ガクタン司教様の存在があるのだと思います。

私たち司教団は、東日本大震災後の11年間仙台教区を応援してまいりましたが、ガクタン司教様と共に仙台教区のこれからのために、同じように応援を続けていきたいと思います。どうぞ皆さんもガクタン司教様を大切にして、これから素晴らしい教区を作り上げて行ってください。今日はおめでとうございます。

## 司教叙階式のアルバム



全国から集まった司教団と教区の司祭団、修道会、関係団体の代表者と教区の信徒代表が叙階式に参列した。



受階者は祭壇の前で床に伏し、諸聖人のとりつきを願って「連願」が歌われた



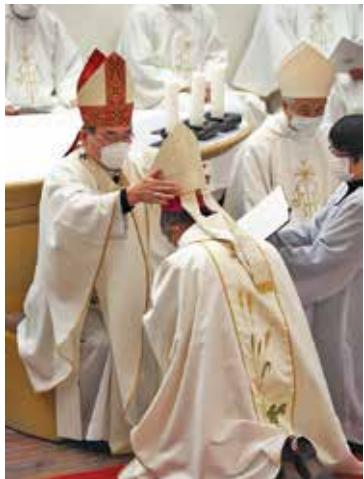
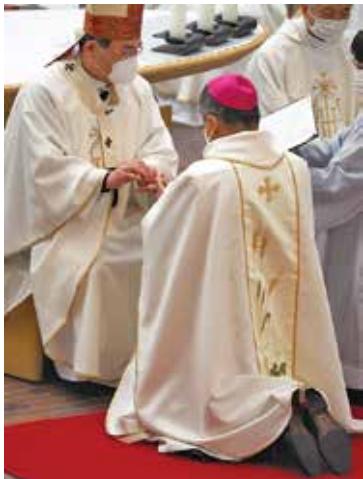
任命書は、會津隆司神父によって司教団と会衆に提示され、  
教皇大使ルネ・ボッカルディ大司教と小松史朗神父によって朗読された



頭の上に聖書が載せられ、叙階の祈りが唱えられた



司教団の挨拶と祈りがささげられた



聖書、指輪、ミトラ(司教帽)、バブルス(司教杖)が授与された



叙階の儀の後、ガクタン司教の司式で  
感謝の典礼が執り行われた



大船渡教会の代表から記念品が贈呈された

聖堂内を巡り会衆を祝福されるガクタン司教



※叙階式の様子は現在でも YouTube で見ることができます。

動画配信 URL: <https://youtu.be/8NZGupfIRt8>

## ● お祝いメッセージ ●

淳心会来日73年で、初めての司教が誕生した喜びとともに、私たちの会で大きな存在であった人がいなくなつたという寂しさも感じています。

皆さま、ガクタン司教をどうぞよろしくお願ひいたします。支えてください。

淳心会アジア管区副管長・日本地区地区長  
司祭 アントニウス・ハルノコ

教区司祭団はガクタン・エドガル司教様の仙台司教区司教座着任を全教区民とともに心から喜び、歓迎いたします。仙台司教区の司教任命に際し、司教様が神の計らいを思い、祈りをもって受諾されたと知り、待ち望んでいた司牧者を授けられと確信しました。モットー「心も思いも一つに」は全教区民の長年の祈り、望みでした。司教様の新たな歩みに同行させてください。

仙台教区司祭 板垣 勤

司式者の「貧しい人、苦しむ人、助けを必要とするすべての人に、主の名において、神のいくしみを示しますか。」問い合わせに「はい」と力強くお答えになるガクタン司教様の姿に感銘を受けました。私たちが「心も思いも一つにして」開かれた教会として共に歩んでいく事ができますように、日々祈り続けていきたいと思います。 Sr. 細谷 朋子（オタワ愛徳修道女会）

私たちの仙台教区の司教様に大船渡教会とカリタスペースの活動をよくご存じのガクタン司教様がなってくださり、みんなで心からとても喜んでいます。神様に感謝です。司教様に聖靈の豊かなお恵みが注がれるようにお祈りしています。仙台教区を素晴らしい教区になるよう導いてください。ともに歩んでまいりましょう。

菅原 圭一（大船渡教会）

ガクタン司教様、叙階おめでとうございます。遠い海の向こうから福音宣教のため来日され、被災地支援にも尽力されたお働きに心から感謝と御礼を申し上げます。私たちはガクタン司教様のもとで「心も思いも一つに」信仰の歩みを続けてまいりたいと思いますので、どうぞよろしくお願ひ致します。また、司教様がお住まいになる司教館は東仙台教会の上にあり、私たち信徒は声を合わせてお迎えしたいと思います。「ようこそ、光が丘へ！」

和野 由美（東仙台教会）

ガクタン司教様の叙階を心よりお祝い申しあげます。コロナ禍で通常の教会活動が難しく司教区の指導助言を仰ぎたい場面も多いだけに、司教様の着座はうれしい限りです。東日本大震災の復興支援活動やカトリック青年労働者連盟に携わったご経験をもとに、私たちをよりよい信仰の道に導いてくださることを期待しております。

永井 功（浪打教会）

ガクタン・エドガル司教様、叙階おめでとうございます。

2017年4月、水沢教会でのインターナショナルミサ後にお別れ会をして早5年。まさか司教様として仙台教区に戻って来られるとは思ってもみませんでした。本当に喜びでいっぱいです。

水沢教会信徒一同、再会を楽しみに待っています。SALAMAT AS DIYOS！（神に感謝）

斎藤 知子（水沢教会）

ガクタン・エドガル神父様、待ちに待った仙台教区の司教様としてようこそお出でくださいました。心から感謝と歓迎の意を表したいと思います。司教叙階式に参加させていただき、素敵なお笑顔と、流暢な日本語と、57歳という若さに期待しています。

どうぞ仙台教区のため、われら信徒のためにお力を貸してください。今後ともよろしくお願ひ致します。

渡邊 久男（郡山教会）

幼少期から通った元寺小路教会で、新しい司教様を迎える節目のミサを、紅一点の侍者として奉仕できることを、誇らしく思います。コロナ禍の中でさまざまな制限のあった叙階式ではありましたでしたが、YouTubeにも残る一生の思い出となりました。ガクタン司教様、これからのお仙台教区を力強く導いていってください。

牛坂 典礼紗（元寺小路教会）

ガクタン司教様、司教叙階おめでとうございます。青年会では、カウントダウンやメッセージ動画の制作を通して司教叙階・着座の日を心からお待ちしていました！ガクタン司教様は、いつも青年たちに寄り添い、仙台教区の若者をよりよい信仰の旅路に導いてくださると確信しています。青年会一同、喜びのうちに。

カトリック仙台教区青年会 代表  
先崎 まこ

# まず、信徒の皆様と出会い、お話ししたい！

教区報広報委員会は、ガクタン司教様が東京から荷物をまとめ、仙台に来られた1月31日に、さっそくインタビューさせていただきました。

東京の松原教会から電車で仙台まで、その日の仙台教区の司祭月集に参加された後のインタビューでしたが、さぞお疲れになられたのではないか、との広報委員たちの心配もものともせず、にこやかに応対してくださいました。

## 司教に任命された時は、どのように受け止められたのですか？

12月1日(月)に教皇大使に呼ばれ、教皇庁大使館にまいりました。そこで、大使から「あなたをフランシスコ教皇が仙台司教区司教に任命なさいました」と告げられたのですが、そのお知らせを受けた時、私は自然に涙が出てきました。それは、大変光栄だと思うと同時に、恐縮したために、涙が溢れてきたのでした。そのままチャペルに案内していただき、しばらく祈り、教会のために、この奉仕を担わなければならぬという気持ちで、「引き受けさせていただきます」とお答えいたしました。

## ところで、どのようなきっかけで、司祭への道を歩もうと思われたのでしょうか？

私の「司祭への召し出し」の歩みは、二段階のプロセスがあったと思います。

私は、カトリック・ファミリーに生まれましたので、生後3ヶ月で洗礼を受けました。家族そろって、夜休む前に一緒に祈ったり、日曜日には家族そろって教会に行きました。そういう中で私の信仰が徐々に育ってきたと思います。

最初に教会のミサで、侍者をしたのは小学校6年生の時、侍者としての初奉仕はちょうど2月2日(主の奉獻の祝日)でした。その時から、主が恵みをくださったのだと思いますが、「召し出し」について考えるようになりました。

教会生活では、教区のいろいろな司祭との関わりや、宣教師たちとの出会いなどがあり、高校生になったあたりから、広く世界に出て宣教する修道会に関心をもつようになりました。いろいろな宣教会との出会いがあり、神学生たちとの交流を通じて、「私でも、この道に入っているのではないか…」と思うようになりました。これが、第二の「召し出し」のプロセスです。



こういう「召し出し」の歩みがあり、その招きに従い、淳心会に入ることを決心したのです。

## 淳心会に入会なさってからの歩みについても、お聞かせ願えますか

まず、フィリピンのバギオにあるセントルイス大学で、哲学を学んだ後、修練期を終えて1986年初誓願を宣立いたしました。その後、マニラにある淳心会が設立した神学院で神学を勉強し、1990年に淳心会の神学生として来日いたしました。これは淳心会のインターンシップという制度で、私は大阪で日本語の勉強と、宣教司牧の体験をしました。

1991年、終生誓願を宣立。1992年3月20日大阪のカテドラルで助祭叙階の恵みをいただきました。私たちは、いつも教区の神学生たちと一緒に助祭叙階式などを受けるのですが、この年は珍しく、大阪教区には該当者がおられなくて、淳心会の3人が助祭となりました。

その後、神学の勉強を終わらせるために、1993年の3月フィリピンに戻り、1994年4月23日、母国で司祭に叙階されました。同じ年の5月、再び日本に派遣され、大阪教区において、小教区の宣教司牧活動や、カトリック青年労働者連盟(JOC)と活動したり、淳心会の日本管区の管区長を務めたりしていました。

## 2014年には仙台教区の大船渡教会に来ていただきましたね

そうそう、もともと淳心会と仙台司教区は縁がなかったのですが、東日本大震災の被災を受けた仙台教区に、日本のカトリック教会が全体として支援するという「オールレジャパン」の体制が組まれ、その一環として修道会にも声がかかりました。その時、わたしは淳心会日本管区長

任期中でした。震災直後から大船渡の地域の避難所をイエスの小さい兄弟会の塩田希神父が回ると、そこに大勢のフィリピン人のお母さんたちがいて、その人たちに教会を紹介して下さいました。大阪教区の神田裕神父の話では、大船渡には外国人司祭派遣への強い要望があるということが分かり、まず、淳心会のハルノコー神父とギャリー神父が派遣されました。ハルノコー神父はベース長として、滞日外国人支援センターの働きをかねて大船渡を中心に活躍いたしました。2014年、ハルノコー神父が養成担当者となるために修道会の都合でその任を離れたので、次に私が大船渡に来ました。ちなみに、今年の1月、私の後任にハルノコー神父が淳心会日本地区長として任命されました。



カリタス大船渡ベース  
「地の森いこいの家」で  
子どもたちと



カリタス大船渡ベースのスタッフと

最初に仙台に着いた時はそれほど大震災の爪痕を感じなかつたのですが、被災地に近づくにつれてだんだんとその様相がひどくなり、大船渡についた時は、その被災のすごさに言葉が出ないくらいショックを受けました。

大船渡教会では、大阪教区が担当していた「カリタスジャパン大船渡ベース」のベース長として、また大船渡教会の司牧、それに滞日外国人の世話をすることも頼まれました。仙台教区の地区制の第4地区に入っていました。楽しかつたです。滞日外国人のために青森から福島のいわきまで車でまわり、ミサをささげ、話を聞き、相談にのるなどのお世話もしていました。

ある日、スーパーに行ったとき、たまたま入港した外国船の船員たちと出会い、彼らを教会に誘い、共にミサをささげました。ミサは、彼らの心のよりどころであり慰めと力の源になつたと、大変喜ばれました。

大船渡での3年4ヶ月の期間は、大変楽しかつたのですが、2017年、仙台教区を離れることになり、修道会の仕事のため、東京に派遣されました。

## 司教様は、これまでの司祭生活の中で、何を大切になさっていらっしゃいましたか？

「イエスにならうこと」、「ミサを大切にすること」、そして「聖書の勉強会」での分かち合いです。

ミサにおいても、勉強会においても、参加する人々が日常の生活で、神によって照らされていること、また、聖書のみことばで日常生活を照らしていることなどを、お互いが分かち合ったり、みことばを深めていくことです。

## 司教様のご家族に、今回の司教任命について、お話になりましたか？

はい、電話で伝えました。両親は、もう他界しておりますが、兄、姉、2人の妹がいます。その一人一人に電話をしました。「私たちの家族に何と光栄なこと！　あなたの責任は大きいので、しっかりがんばってください」とエールを送ってくれました。

## 仙台教区の信徒に、何かご希望などがあれば、一言お願ひいたします

叙階式後、各小教区を訪問し、信徒の皆様とお会いして、まず、皆さまがたのお話にできるかぎり耳を傾けていきたいと思っています。今はシノドスとの関連もありますし、いろいろな方とお会いして、ご意見を伺い、仙台教区のこれからについて、腰をすえて考えていきたいと思います。

フランシスコ教皇様は2023年10月にローマで「世界代表司教会議(シノドス)」を開催されると発表されました。そして、昨年10月から、全世界の信徒に、その準備と一緒に始めるように呼び掛けておられます。初代教会がそうであったように、信徒も司祭も司教も「共に歩む教会」になるという呼びかけです。ですから、皆様と「共に歩くこと」をより意識して、歩んでいきたいと思っています。

神の国の建設のために、働きたいのです。いろいろな人と話し、どんな希望をもっているか、この時代にどんな教会共同体を作ればいいかななど、お話をうかがいたいと思っています。どうぞよろしくお願ひいたします。

## 司教様の、ご趣味は何でしょうか？

趣味といって、特別なものはありませんが、しいて言えば、散歩、温泉などでしょうか。

それでは、司教様、健康に気をつけて、これからよろしくお願ひいたします。

(教区報広報委員：長谷川 昌子、上野 隆、関 毅)

# 教区の諸活動

## 一緒に食べる？〈仙台教区青年会から〉



先日、テレビを見ていて気づいたのですが、幸せのために食べ物を分け合うというドキュメンタリー番組は、ほとんどがかわいらしいおじいちゃん、おばあちゃんが主人公になっています。20歳の私は彼らより半世紀も若いのですが、私の心は食との関係を皆さんと共有することを強く求めています。

私はインドネシアから仙台に留学して化学を学んでいる外国人で、青年会の副会長をしています。まさか、この文化的に全く異なる国で、“新鮮な手作りのフライドチキン”が、私の心の救いになるとは思いもよませんでした。

4年前、私は一人で日本に来たので、話す相手もいませんでした。言葉の問題があり、基本的には「すみません」と「ありがとう」だけしか話せませんでした。私は一人で自分のためだけに料理をします。自分のことを認めてくれる人が誰もいないので、自分で自分を褒めていました。“誰か私の料理を分かってくれる？”と自問自答しながら、SNSに写真を投稿し、注目を浴びることを期待していました。だんだんと、カルチャーショックと孤独の空虚の中に深く溺れていきました。

2019年冬の青年会のクリスマスパーティーでは、コストコのローストチキンが2つ、大きなチョコレートケーキが1つ、サラダとチップスが山ほどあって大賑わいでした。私はテーブルの隅に、自家製フライドチキンを詰めた中型の容器を2つ置きました。ローストチキンの輝くような皮と、ジューシーに見える白い肉を見ると自信がなくなりました。しかし、驚いたことに、青年会の全員が私の“フライドチキン”を気に入ってくれたのです。私のフライドチキンだけは完食してくれたので無駄がでませんでした。「こんなフライドチキンは食べたことがない!」「皮はパリッとしているのに肉汁があふれ出ていて、香りも実に爽やか!」「本当に自分で作っているのですか?」「レシピはどこで手に入れるの?」。みんなのポジティブなフィードバックと愛に圧倒されました。



青年会のコミュニティは、私が趣味に生きることと、それらを他の人と共有することによって、それにより多くの意味を与えることを後押ししてくれました。自然と青年会のコックになりました。味覚は、まさに世界共通語です。青年会は私に第二の故郷と呼べる場所を与えてくれたのです。まさに「食の神学」ですね。一緒に食べませんか？

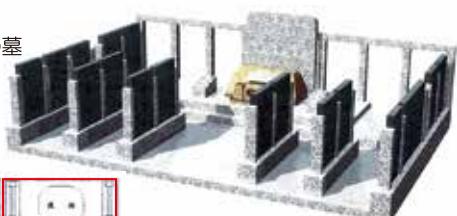
カトリック仙台教区青年会 副会長  
カルロス・バプティスタ

## 【鶴ヶ谷墓地管理委員会からのお知らせ】

カトリック鶴ヶ谷墓地(仙台市)のキリスト兄弟姉妹の墓につきまして、2022年4月～5月末に、向かって左側の用地(修広06)を加えて一体化する工事を予定しております。工事期間中はご不便をおかけすることがあるかもしれませんのが、ご協力のほど、よろしくお願ひいたします。

カトリック鶴ヶ谷墓地 管理委員会  
委員長 小野寺 洋一 神父

キリスト兄弟姉妹の墓  
完成予想図



平面図



現在の兄弟姉妹の墓(修広05)

# 各地区からのお便り

## 第5地区より

### 〈西仙台教会〉待降節黙想会



待降節を迎えた11月28日、西仙台教会はラファエル師を指導司祭として黙想会を行いました。この黙想中、私は自分が信じるものは希望・愛・信頼・光の信仰であることを再確認することができ、喜びをもって過ごすことができました。

話は待降節とは何なのか、私たちはどんな準備をして降誕を待つべきなのかといったことから始まりました。イエスの誕生を思い起こせば、民から受け入れられず、真っ暗な家畜小屋の中でお生まれになった。そのような誕生のありさまは、悩みながらそして迷いながら今の世に暮らす私たちにとって、光・喜び・希望となるための姿であったと力強くお話し下さいました。その光を私たちは奇麗な心でお迎えしなければいけない、と。それは回心の秘跡を受ければよいと言うことではなく、場合によっては自分の生活、性格を変えなければいけないといった痛みを伴うかも知れないということも話されました。

さらに光の主を迎え、さらにその再臨を信じる私たちに、どんな時にも信仰を持ってマラナタ（主よ来てください）と呼び掛けましょうと呼び掛けられました。悩んでいるときに「マラナタ」、迷っているときに「マラナタ」、信仰が弱っているときに「マラナタ」、人との関係が悪くなったときに「マラナタ」と。

キリストに出会うことができた喜びを改めてかみしめた黙想会でした。感謝！！

高山 昭子（西仙台教会）

### 〈石巻教会〉 詩編へのいざない

待降節第1主日の11月28日は仙台から李錫神父をお迎えし、ミサ中に黙想会が行われた。

この日のお説教のテーマは「詩編」。神父様のおだやかな声を聞くうちに、熱いものが胸に広がっていったように思う。

それは冒頭の「いかに幸いなことか」の一一行にいきなり胸をつかれてしまったことにある。初めてではないのに、なぜ、この言葉がこの日、火球のように、心の真ん中にストンと落ちて来たのか。浅学の私にはふさわしい言葉が見つからない。理屈抜きにただ「ひかれた」としか言えないである。

同時に、脳裏に浮かんだのが、痛切な記憶である10年前の震災のことだった。すべてを失い、それでも必死に歩き出した日々が昨日のことのように思い出されたのである。あの経験は今、自分の中でどのように生きられているのか、目の前の小さな喜びに気付かずに過ごしているのではないか、と問われたような気がしたのだ。

「いかに幸いなことか」

詩編の言葉が

私の心をともしてくれる

とにかく今は

生きている

この短い言葉に思いがけなく、深くもの思うことができ、待降節の気持ちの準備が少しできたような気がしたのである。



詩編の入口まで誘ってくださった李神父、寒い中、ありがとうございました。いつかまた、オルガンの調べにのせて多くの方々とともに詩編を歌う日を辛抱強く待ち続けたいと思う。以前のように、以前とは少しづがう心もちで。

佐藤 幸子（石巻教会）

## 第6地区より

### 〈八木山教会〉教会学校のクリスマス2021

東仙台教会所属の小学生の息子は、ご縁をいただきて団々しくも八木山教会の土曜学校へ時々参加させてもらっています。八木山教会の土曜学校では、クリスマスの夜半ミサの前に子どもたちの聖劇をしてきたそうです。新型コロナが騒がれる直前の息子が1年生の時は、24日の小教区夜半ミサの前に会衆が見守る中で、卒業生のお兄さんお姉さんにサポートされながら羊飼いをさせてもらいました。コロナ禍に入った2年生の時は、土曜学校のリーダーの方々が子どもたちに何とか体験させてあげたいとさまざまな対策を講じて、クリスマス前の土曜日に子どもたちと保護者だけで行う聖劇に混ぜてもらいました。そして、今年も制約がありつつもその中で可能な限りのさまざまな策を講じてくださった中で、土曜学校として聖劇をするチャンスを設けてくださいり、そこに集まった子どもたちは一生懸命にそれぞれ与えられた役を演じていきました。

夕方集合した子どもたちは、それぞれの席に事前に決まった役の衣装や小道具が置かれており、集合した人から着替えていきます。衣装は身近にあるものを活用して工夫されており、こういう使い方ができるというアイディアに溢れています。小道具も手作りで、ずっと前から大切に使われていて補修されたりしているせいか子どもたちによく馴染むようで、土曜学校のリーダーの方々が、大切にしてきたことをしみじみと感じさせられるものばかりです。(3人の博士の馬は男の子たちにとっては戦いごっここの武器になっていたりもして申し訳ない限りです…)

まず始めに、それぞれが持ち寄ったお祈りを集まったみんなの前で唱えます。順番とか強制ではなく、子どもたちも自発的に手を挙げて祈ります。その言葉は、神さまに向かう子どもたちの純粋な気持ちでキラキラしていて、不覚にもうるっとしてしまったくらい心に響くものでした。混ぜていただくようになって早3年近くになるので、我が子だけでなく、一緒に参加されているお子さんの成長も、我が子のことのように感動します。

「しづけき」の流れる中、ほぼぶっつけ本番で聖劇が始まるとき、緊張しているのは大人たちばかりで、子どもたちはしっかりと集中して自分の台詞を言って動き出します。約20分の聖劇は、子どもたち同士がそれぞれの動きを見ながら、子どもたちの間に入った卒業生やリーダー方大人たちのサポートもあり、「星」に導かれて、10



力月の赤ちゃんから大人まで、イエス・キリストの誕生を迎えることができました。「クリスマスは全ての人の救いの記念日なのです。」という最後のナレーションの通りになるよう願う気持ちが溢れて、思わずアーメンと応えたくなってしまうほどでした。

八木山の聖劇に欠かせない「星」は、当日おいでになった神父さまが演じます。大きな星に扮した神父さまが、ヨゼフとマリア、羊飼いたち、博士たちを導きます。今年は、ライトアップした自前の釣り竿を持ったミゲル神父さまでした。聖劇が終わった後、ミゲル神父さまから「街に出ると光がいっぱいです神さまが与えてくださったイエス・キリストの光が全然見えない。あまりにまぶしくてこの大事な大事な光がわからない。だからちょっと離れて暗いところに入ると、星空がいっぱいある。その素晴らしさをわかるように、時々まぶしい光から離れることが大切です。クリスマスの時には、この小さな光を見るために、大きくまぶしい光からちょっと離れて、その小さな光を見つめるように。プレゼントの中でまぶしくてきれいな催しがあっても、その中には実は大切な事がある。」とお話をありました。

聖劇の時に照明を落としたおみ堂の中で子どもたちが光り輝くように見えたのは、2000年以上前のユダヤのベツレヘムでお生まれになったイエス・キリストに思いをはせることで、神さまから与えられたわたしたちの命はわずかな光かもしれないけれども、本当に大切なもののだと気付かせてくれたように思います。

最後になりますが、「いつか、神さまの愛に救いを求める時があれば、土曜学校の思い出が力になるかも」という想いで、このような機会を設けてお誘いくださる土曜学校のリーダーの方方と、土曜学校をバックアップしてくださる八木山教会の信徒の皆さんに、神さまのお恵みがもっとありますようにと祈らせていただきたいと思います。

及川 幹子（東仙台教会）

## 信徒のつぶやき

### 多喜子さん お久しぶりです <千厩教会での思い出>

教区報 244 号の「イエス様に促されて」千厩教会の千葉多喜子さんのつぶやきを読ませてもらいました。

なつかしいです、多喜子さん。お久しぶりです、その節はとてもとてもお世話になりました。

私は、2011年3月11日、東日本大震災の被災者となって一関市藤沢町(当時は東磐井郡)のみなし仮設に5年6ヶ月お世話になりました。

その時、千厩教会を捜し求めて見つけ、ミサにあづかって多喜子さんや千厩教会の優しい人たちに出会いました。

私の故郷の教会よりも小さい千厩教会でした。信者さんたちは高齢の方たちでした。明るく親切に、気持ちよく受け入れてくださいました。本当に、ありがとうございました。

あの頃、全国から届く支援物資が千厩教会にも届いていました。

ミサ後にその物資を「これはステキ、それは

若者用…」と賑やかに仕分けをして、教会近くの仮設住宅の被災者の方々にお届けしたりしていました。私はいつもご一緒させていただきました。

そんな折、多喜子さんは「こんなことをしていると神様と一緒にいてくれてるかな!!って感じるの」とおっしゃって、その喜びは多喜子さんの体中からあふっていました。私の印象に強く残りました。

「つぶやき」を読ませていただいて、多喜子さんはいつも変わらない、いつも神様と一緒にないと、10年前を思い出しながら、うれしく思いました。

多喜子さん、千厩教会の皆さん、その節は本当にありがとうございました。

十 主のうちにあって幸せ

佐藤 優子 (大船渡教会)

## 訃 報



Sr. マリア クララ 川尻 和子 (善き牧者の愛徳聖母修道会)

### 〈略歴〉

1931年 1月 2日生まれ  
1956年 5月 24日 初誓願  
2022年 1月 6日 帰天



Sr. マリア エスペランザ 安藤 芳 (聖ドミニコ女子修道会)

Sr. 安藤芳は、長く教職に献身しました。東京や仙台で小学校の教職を務めた後、Sr. 鈴木かな子（元聖ドミニコ学院理事長：故人）と共に、

宮崎県小林市の教会で宣教活動に取り組み、付属幼稚園職員とさまざまな結びつきがありました。その後、仙台のドミニコ学院小学校廃校の話が出たさいに、小学校校長として仙台にもどり、父兄や小学校職員と一緒に小学校を発展に導きました。退職してからは、西仙台教会での宣教活動に取り組み、東日本大震災のおりには卒業生からの寄付をも

とに、信徒とともに仮説住宅訪問活動を行いました。高齢になってからも、被災地のさまざまな人々とつながりができていきましたので、電話でお訪ねくださる方がたくさんおられました。中島丁修道院で、姉妹に見守られながら静かに息をひきとり、御父の元に魂を委ねることができたことは幸いな事でした。

### 〈略歴〉

1928年 3月 17日 福島県会津若松市生まれ  
1951年 12月 24日 福島市で受洗  
1955年 4月 20日 入会（仙台 角五郎町）  
1962年 8月 30日 終生請願（東京）  
2022年 2月 28日 帰天（仙台 中島丁）

# 司 祭 紹 介

## 十字架の聖ヨハネ　會津 隆司

### ○生年月日

1950年(昭和25年)

5月6日

### ○出 身 地

東京都中央区

### ○司祭叙階

1989年4月29日

元寺小路教会



あらためてこのような自己紹介文を書く意味をあれこれと思い巡らしています。司祭になって30年あまり、今年は寅年。年男です。まだまだ若輩ものだと思っていたのに、気づいてみれば先輩の司祭がどんどん減り、自分自身もお爺さんと呼ばれてもおかしくない年齢になっています。

### 司祭を志したきっかけ

振り返ってみれば、自分の歩みの糸余曲折そのものが召命の歩みだったように思われます。東京(中央区)で生まれ(1950年5月6日)育ち、大学は仙台へ。工学部に入学したものの、思うところがあり、卒業後教育学部へ。そして大学院に在籍中に受洗。盛岡の短大・大学で教職の仕事をした後、神学校へ。司祭になりたいという思いはどのように生じたのか。あの神父さま方のように生きてみたい。これに尽きるのではないかでしょうか。しかし、あの神父さま方のように特別な才能はない。ある時期、岩手県千厩の教会が司祭不在の教会になりました。そのとき思ったことがあります。せめてこの教会の灯を消さないように。夜、電気を灯しているだけ、それだけでもよい。そのために司祭になれば。そんな思いがかなって、司祭叙階(1989年4月29日)の恵みをいただきました。その後の歩みは、弘前、浪打、仙台、会津若松、築館、氣仙沼、石巻など。転々と各地の教会・幼稚園で働いてきました。震災(2011年3月11日)も氣仙沼・大船渡在任中に経験しました。すべてが神さまの導きだったと思います。そして、今も思うことは同じです。

「神さまのなさることは、すべて時にかなって美しい」(伝道の書 3:11)。

### 大切にしていること

大切にしたいこと。それは、あり当たりかもしませんが、イエスさまのあの言葉です。「私があなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」(ヨハネ 13:34)これ以上の言葉をみつけることはできません。たとえ意見の違いがあろうとも、ひとの生きざまを尊敬したい。個人であろうと、共同体であろうと、この世に完璧なものはありません。だから不完全であっても、その個人・共同体を大切にする。これは先輩の諸聖人・聖女から学んできたことです。信仰を共にするか否かを越えて、ひとを大切にすること。いわきの地にあって、このことを信徒の皆さんと共に生きてゆきたいと願っています。

## ペトロ 小松 史朗

### ○生年月日

1965年(昭和40年)

5月13日

### ○出 身 地

宮城県多賀城市

### ○司祭叙階

1996年4月29日

元寺小路教会



### 若気の至り

「若気の至り」とは、若さに任せ、勢いで決断し、失敗することを言うのだろう。

この原稿を依頼されてから、自らの召命について思いを深める時、「若気の至り」この言葉が先んじて思い浮かぶ。司祭叙階式の際に司祭職を最期まで全うする自信のなかった青年は、新司祭の挨拶の中で何とか全う出来るように会衆の皆さんにお祈りをしてくださるようお願いしたのを覚えている。あれから25年が過ぎようとしているが、未だにあの時の気持ちは変わっていない。それどころか、あの時の決断は「若気の至り」だったのではなかったのかとの邪念が脳裏をかすめるようになった。もちろんさいなまれている程ではなく、かすめる程度だからなんとか続けて来られたのかも知れない。この原稿を読まれた方々には、ぜひともお祈りしてい

ただきたいと切に願っている。何故なら皆さま方のお祈りのおかげで25年を迎えたのは紛れも無く事実であるからだ。

「若気の至り」の動機故に、明確なものがあつた訳ではない。こんなことを覚えている。普通高校を卒業した青年は、進学すること、就職することに反発し、否、単純に将来に対して確固とした目的も持たずにぶらぶらと遊んで暮らしていた。お金が無くなれば、バイトをし、腰掛けのように仕事をし、バイト代が入れば、パチンコや地元多賀城の吹きだまりのような連中とマージャンに明け暮れ、働くでなし、学ぶでなし、親のすねをかじるだけかじって飽き足らずにしゃぶり続けるようなどうしようもない生活をしていたように思う。半面、教会には通っていて、青年会の活動やら、教会学校の手伝いやらで、教会の中では好青年で通っていたように思う。何故に教会に通っていたのだろうとふと思うことがあるが、山を動かすほどの信仰どころか、砂粒一つ動かすことの出来ない信仰とも言えないような思いを持ちながらも、教会には青年の居場所が確かにあったのだ、どうしようもなさを生きている青年を黙って受け留める空間が…。中には黙っていない方も居た。元寺小路教会の板垣師には、「金輪際、パチンコはやりません！」との誓約書を複数回書かされている。複数回書く方は懲りないが、書かせる方には優しさがある。複数回が大切なのだ。

そんな「若気の至り」にもちょっとした転機が訪れる、ちょうどその頃、仙台教区に「マザーテレサ」が来仙する。1979年にノーベル平和賞を受賞していた彼女であったので、その講演には、仙台市民もたくさん的人が集まつたのを覚えている。青年は駐車場係でしかなかつたし、話の中身はほとんど覚えていないが、多賀城の田舎で育った青年は、カトリック教会が世界でつながっていることを決定的に意識し、にわかに世界を自らの視野に収めたようなとんでもない勘違いをしたのだった。「よしつ！オレは世界

に打って出る」そもそも何をもってして世界なのか？どのようにして打って出るのか？はっきりとした目的も方法も考えずに心に秘めたのだ。あの時、マザーテレサに倣い、考え方が一変し、生活が変わっていたなら、司祭を志すことは無かったのではないかと思っている。実に不思議な話で、人の思いとは裏腹に神の思いが働くのだとすれば、いい加減の方が良く働くのかも知れない。それから2年程は定職に就いた。世界へ打って出るための資金を貯めるためであったが、一向に貯まらない。昼は仕事をしていても、終われば飲みに行く、パチンコを打つ、車で遊びに行く、まるで栓のない風呂おけに水をためるがごとし。それでも、いつかは世界に行くのだとの微かな思いは消えてはいない。未だ「若気の至り」の時は來ていない。この頃になると、地元の連中も仕事を決め、少しずつ疎遠となり、教会の中でも青年の行く末を心配する声がちらほらと聞こえるようになる。青年はここで一念発起し、家族のぬるま湯、教会の居心地の良さから離れ、外国に行くための資金を貯めるために地元を離れ、愛知県のトヨタ自動車の部品工場で働くことを決めた。ともかく100万円貯めるまでは多賀城に帰らないことを決めたのだ。

ここから、「季節工」として働き、資金を作り、次の年にインドに単身で渡り、1年弱の期間インドで放浪生活を送った。何故にインドか？ここにもマザーテレサが関係するのだが…。この2行の中には書き切れない程のエピソードが詰まっている。紙面の関係上、今回は戻切れトンボで失礼するが、機会があれば、またどこかで紹介したい。

インドから帰って来た時に、今は亡き笠原直哉師に、神学校入りを勧められる。司祭になること勧められたのではなく、「神学校は楽しい所だから一度行ってみると良い、楽しくなければ、帰ってきて良いから！」と記憶している。あれから30年。「若気の至りは」未だ司祭と呼ばれるには程遠い生き方の中でもがいている。

## 編集後記

仙台教区に新しい司教様が生まれ、教区全体に新しい流れがおこることを、心から期待しております。今回も、皆さま方の投稿に支えられ、なんとか発行することができました。

仙台教区広報委員会では、原稿の投稿を募集しております。投稿は随時受け付けていますので、下記のメール宛てに添付ファイルでお送りください。また、メールをお使いでない場合は教区事務所宛てに、手紙でお送りいただいても結構です。

sendaiyoukuho@gmail.com

次号発行予定日：8月7日(日) 原稿締め切り：5月末日

# 「ガクタン音頭」

ガクタン神父様が仙台司教になられるというお話を伺い、大船渡教会のみんなは狂喜乱舞しております。

神父様は津波後のカリタス・ジャパン大船渡ベース「地ノ森憩いの家」の指導者として、また大船渡教会の主任司祭としてわたくしどもを心から愛し、励まし、導いてくださいました。神父様が転任なさる時、送別会の時に、侍者を務めている小学一年生の子どもヒロシ君（お母さんはフィリピン人）などは神父様に抱きついて大泣きに泣いたものです。神父様もみんなも貴い泣きました。そのときにわたしは「ガクタン音頭」という詩を作

つて、信者一同みんなで声を揃え大きな声で朗読して神父様を送りました。

なお、詩の中に出てくる「コヒドロ山」とは大船渡教会の建っている丘の名前、「アマ・ナミン」は「我らの父」という意味のタガログ語です。

大船渡教会には100人近いフィリピン人のお嫁さん達がいて、御ミサの時には必ずタガログ語で「主の祈り」を歌います。この頃はベトナム人の若い女性も加わり、ベトナム語の「主の祈り」も唱えています。

山浦 玄嗣（はるつぐ）（大船渡教会）

※「ガクタン音頭」は叙階式でも披露されました。

## ガクタン音頭

作詞・山浦 玄嗣

遠くはるかな南の島の  
椰子（やし）の木繁る白浜で  
潮騒（しおざい）の声が呼んでいる  
潮風の声が呼んでいる  
それ、目を見ませ  
目覚めろ、ガクタン  
耳を澄まして聞いてみろ  
黒潮流れる北の果て  
助けを求めて泣く声が  
お前の耳に入らぬか  
海は逆巻（さかまき）  
地は震（ふる）い  
山は崩れて波間に沈む  
幾万人の泣く声が  
お前の耳に入らぬか  
ガクタン、ガクタン  
目を覚ませ  
昼寝の時間はもう終わり  
そこでガクタン飛び起きた  
ハンモックから跳ね降りた  
聞こえる聞こえる、聞こえるぞ  
はるかな北の遠い島から  
アマ・ナミン、お父さん  
あなたの助けが必要です  
わかつた、待つてろ、今行くぞ！

ガクタン、ガクタン、  
ガクタン、ガクタン、  
跳ね起きた  
ハンモックから飛び降りた  
白砂蹴（け）って駆け出した  
何千里、黒潮の海乗り越えて  
ガクタン、ガクタン、やつて来た  
遠いはるかな北の島  
黒潮の果ての北の島  
青い海、白い砂浜、緑の松原  
豊かな田畠と静かな村々  
それらはみんな昔の幻

ガクタン、ガクタン、  
ガクタン、ガクタン、  
やつて来た  
氣仙（けせん）の浜辺に  
やつて来た  
これはまことか、目を疑つた  
見わたす限り何もない  
あるのは瓦礫（がれき）と泥と砂  
潰れた屋根と崩れ壁  
腐った屍肉（しかばね）しにこの  
臭いに満ちて  
蠅（ブタ）の群がる廃虚の街で  
おお、アマ・ナミン  
ここがわたしの仕事場か

ガクタン、ガクタン、  
手に睡（ね）つけて  
四股（しご）こをば踏んで  
立ちあがる  
どすこい、ガクタン、頑張るぞ

ガクタン、ガクタン、  
ガクタン、ガクタン、  
あなたのことば  
いついつまでも忘れない  
アマ・ナミン  
みんなのガクタン守つてね！

……そして五年の月日が経つて……  
三十六もの月が満ち欠け  
三年（みとせ）の歳が過ぎ去つて  
アマ・ナミンの風が吹き  
新たなお役がやつて來た  
ガクタンまたも立ちあがり  
コヒドロ山を発つという  
南の国に發つという

ガクタン、ガクタン、  
おおい聞いたか、ガクタンが  
アマ・ナミンに寄越（よこ）されて  
みんなのガクタン守つてね！

またもおらほさま（こんだよ）！  
おらどア父さんになんだよ！  
氣仙衆ア泣いて喜んだ  
あつとうでア、どうでアな！※

※「あつとうでア、どうでアなー」=ケセン語・ああ嬉しい。